

文部科学省平成 24 年度

「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究

ビジターセンターが核となった へき地活性化環境教育プロジェクト 報告書



平成 25 年 3 月 NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラスト

目次

第一章 このプロジェクトについて	
1-1 プロジェクトの背景とねらい	2
1-2 プロジェクトで取り組んだ課題	3
1-3 プロジェクトの推進体制	4
1-4 コンソーシアムのメンバー	5
1-5 告知の方法	5
第二章 プロジェクトの実施内容	
2-1 活動内容の区分	6
2-2 社会教育事業の目的と概要	7
第三章 中高生ボランティアの育成	27
第四章 アンケート結果と報告会	
4-1 身近な自然に関するアンケート	30
4-2 地域活性化・環境教育プロジェクトアンケート	32
4-3 報告会と全体の振り返り	37
第五章 成果と今後の取組	
5-1 プロジェクトの成果	38
5-2 成果の要因	40
5-3 今後の取り組み	42
プロジェクトの総括	43

第一章 このプロジェクトについて

1-1 プロジェクトの背景とねらい

「ビジターセンターが核となったへき地活性化環境教育プロジェクト」は、平成24年7月から平成25年3月までの9カ月間にわたり、認定NPO法人霧多布湿原ナショナルトラストが、指定管理制度で運営を行っている「霧多布湿原センター」を拠点に行った活動である。このプロジェクトでは、地域の自然や産業などの魅力を伝えるビジターセンターという目的を持ったこのビジターセンターが核となり、地域で取り組まれている様々な社会教育事業を繋ぐ環境教育プロジェクトを実施した。

地域住民や産業団体など、立場の違う人々が参加し、今までになかった地域内での人的交流が行われたことがこのプロジェクトの大きな特徴である。

活動地域の特徴 ～浜中町の概要～

北海道の道東にある太平洋に面した町。国道を挟んで内陸部での酪農と沿岸部での漁業が町の主要な産業。酪農地帯で生産された生乳は高品質で、チーズやアイスクリームなどの加工品が全国で販売されている。漁業では昆布以外にも、ほっき貝やうに、さんま、毛がになど豊富な海産物が水揚げされる。沿岸部には3168ヘクタールの霧多布湿原があり、春から夏にかけて咲く高山植物の群落を見に多くの旅行者が訪れる。

面積約423k㎡、人口約6,400人。



1-2 プロジェクトで取り組んだ課題

他の農山漁村と同じように、浜中町でも少子化、一次産業の後継者不足、小中学校の閉校によるコミュニティの希薄化などが起こり、昆布漁だけで生活を維持できない漁師は冬場の半年間の出稼ぎを余儀なくされている。畑や宅地などの経済活動には向かない湿原は、身近にあることで反面その価値に気づきにくく、やっかいな場所として扱われてきた。



浜中町の地図

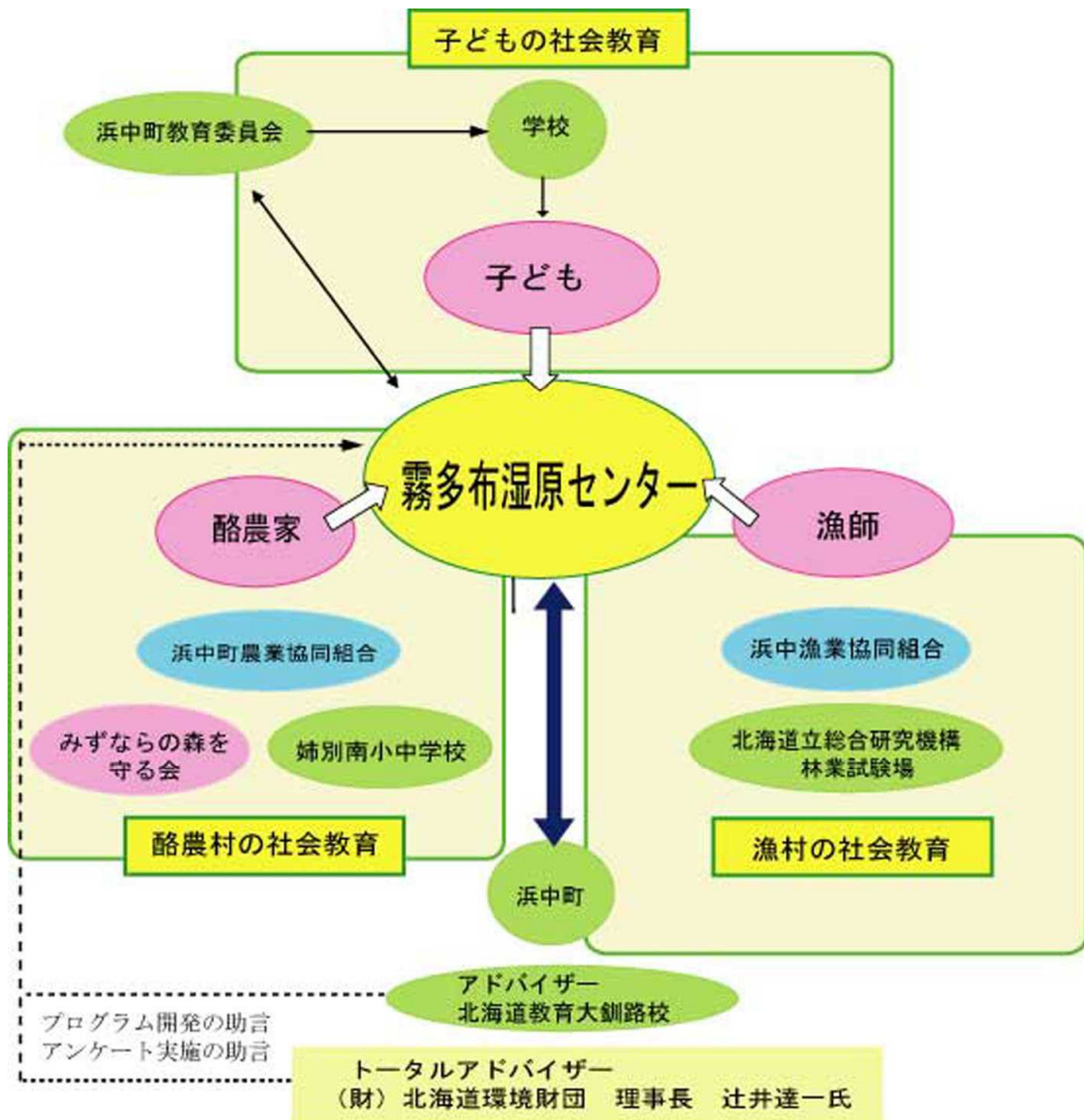
これらの課題に対して、子どもの環境教育、生涯学習、コンサートなどの文化的事業、自然保護活動などの社会教育活動が、様々な組織で個別に行われている現状があり、人材、情報、資金など限られた資源が十分に活用されていない状況であることから、このプロジェクトによって町内の関係団体と連携をとりながら社会教育事業に取り組むこととした。

そこで、様々な活動の中から子どもの社会教育と、漁業地帯と酪農地帯のエリアでそれぞれ行われている社会教育活動に焦点を絞り、以下の課題解決の為にこのプロジェクトを行った。

- 人口の減少や少子化が進み、学校の閉校により、地域住民の交流、子どものコミュニケーションの場が減少していること。
 - 交流の場が生まれ、へき地が活性化する
- 自然と産業は密接に関わっているが、地域住民の自然環境に対する意識が低いこと。
 - 自然環境へ配慮した産業活動への意識改革
- 地域の宝に気づき、地域を誇れ、まちづくりへ積極的に参加できる人材が少ないこと。
 - まちづくりへ貢献できる人材育成の土台を作る

1-3 コンソーシアムの推進体制

このプロジェクトでは、3つの課題に対して、行政や町内の主要な産業団体などとコンソーシアムを形成し、その組合員や会員などの協力を得ながら実施した。



1-4 コンソーシアムのメンバー

	所 属 ・ 役 職 等
浜中町	浜中町まちづくり課・課長
浜中町	浜中町教育委員会・教育長
浜中町農業協同組合	浜中町農業協同組合・参事
浜中漁業協同組合	浜中漁業協同組合・専務理事
	北海道立総合研究機構林業試験場
	姉別南小中学校・教頭
	みずならの森を守る会

1-5 告知の方法

事業の告知は、当NPOのHPや町内へのチラシ配布、新聞への掲載など、なるべく多くの町民の目に留まるよう努めた。

コンソーシアムの主要なメンバーへは、それぞれの事業が行われる際にチラシを郵送し、コンソーシアム全体の動きを随時共有できるようにした。

また、他のコンソーシアムの関係者に参加を呼び掛けたり、ボランティアを募ったりするなどし、お互いの理解の向上や今までになかった人同士の繋がりがうまれるよう意識した。

ホタルの勉強会

ホタルって何を食べているの？

甘い水が好きって、本当？

昔は身近な存在だったホタル、最近では見る機会がずいぶん減っていませんか？
札幌から先生をお呼びして、ホタルの一生や生息する川の条件など、意外に知られていないホタルについて勉強しましょう。

10月31日(水)

ホタルってどんな生き物？
時間：19時30分～20時30分

11月1日(木)

ホタルの生息地探し
時間：9時～10時30分

場所：姉別農村環境改善センター

講師：余湖典昭（北海学園大学）

「考えてみよう！身近な水辺のあり方」など、身近なテーマで分かりやすい講演を、道内各地で開催されています。

申し込み・問い合わせ：霧多布温原センター 阪野 TEL:65-2779

～浜中町の子ども達に、ホタルを見せたいな～

8月にホタルの聞き取りやアンケート調査を行いました。

目撃情報はちらほらと集まってきましたが、

「今まで一度も見ることがない」「浜中町にいないことを知らなかった」

そんな感想が多く聞かれました。

30～40年前、浜中町ではお盆になるとホタルがたくさんいたという話を聞きます。

昔は身近だったホタル、今の子ども達にとってはほとんど見ることがない存在。

もう一度、浜中町にホタルがたくさんいた頃の風景に出会う為に、

ホタルについて一度知る機会を作りたいと思いました。



緑の回廊にご登録ください 105戸、2,164ha（2012年8月31日現在）

緑の回廊への登録は簡単です。まずは酪農技術センターまでお越しください。

お問い合わせ：浜中町農業協同組合 三山まで(65-2141)

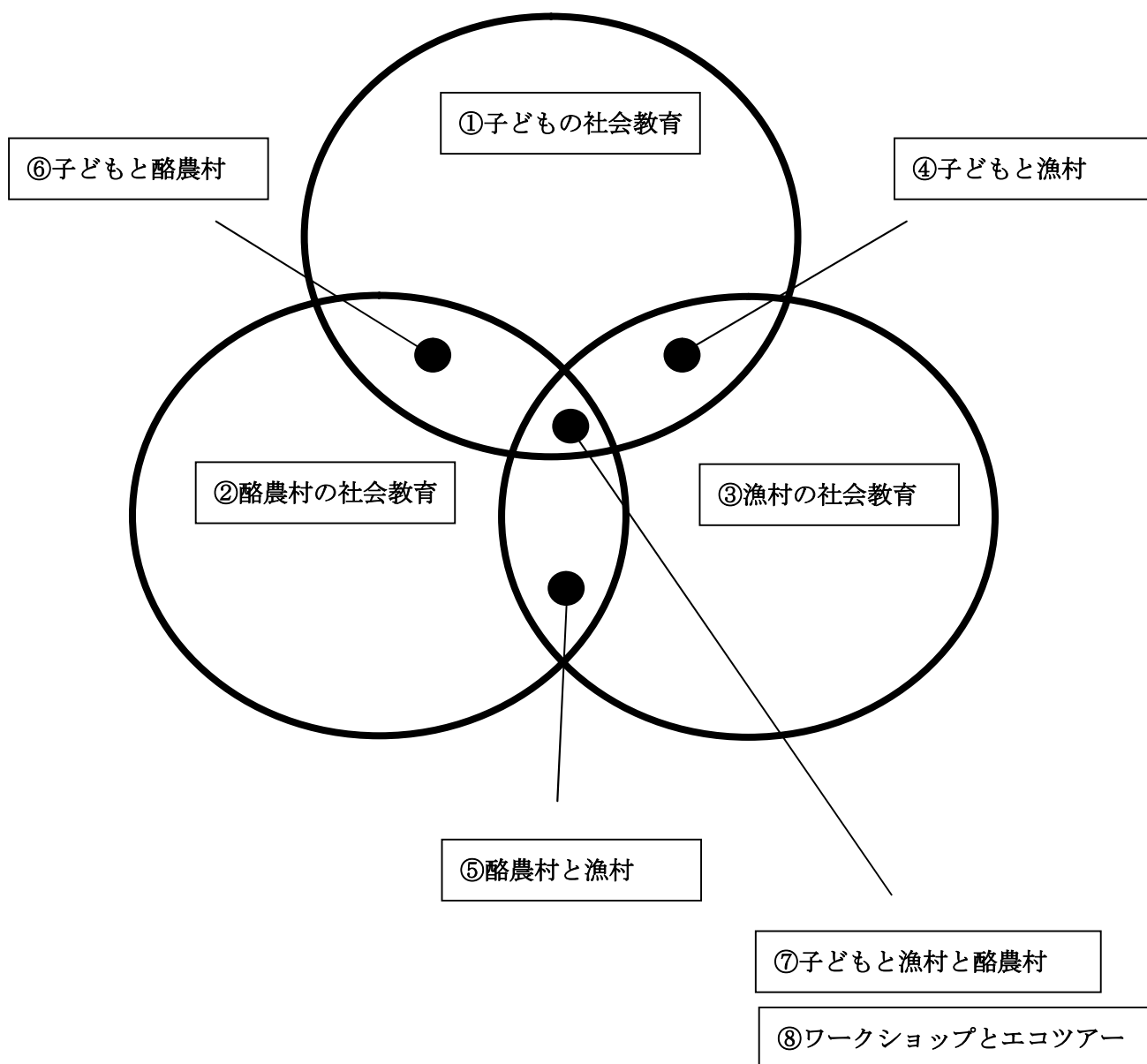
霧多布温原ナショナルトラストは、「緑の回廊」の業務を担っています。

第二章 プロジェクトの実施内容

2-1 活動内容の区分

「子どもの社会教育」「酪農地帯の社会教育」「漁村の社会教育」の3つの社会教育の取り組みについて、それぞれの事業に関わる個人や団体とコンソーシアムを形成し、前途の課題を解決するための活動を行った。

このプロジェクトでは、それぞれの社会教育事業で取り組んだ活動（①～③）と、新たにコンソーシアムのメンバーが共同で取り組んだ活動（④～⑦）の2種類がある。



2-2 社会教育事業の目的と概要

それぞれの社会教育事業で取り組んだ活動

①子どもの社会教育

「きりたっぷ子ども自然クラブ」

町内の小学生を対象にした環境教育活動。ビジターセンタースタッフや地域住民が講師役となり、地域の自然を土台としたプログラムを、月に1, 2回行っている。中学生、高校生、大学生がボランティアスタッフとして関わっている。

②酪農村の社会教育

「緑の回廊」

浜中町農業協同組合と酪農家を実施している、酪農地帯の緑化やまちづくり活動。一度開拓しその後牧草地として使用していない場所を「緑の回廊」として登録する他、植樹や下草刈りといった営農活動と自然の調和が取れた環境作り事業を行っている。

③漁村の社会教育

「湿原と漁業の繋がり調査」

「魚つき林」や「森は海の恋人」という言葉が知られているように、森と海の関係はこれまでも調べられてきたが、湿原と漁業の関係は明らかにされていないことから、霧多布湿原が与える河口部の漁場への影響調査や環境保全に関する普及活動を実施している。

新たにコンソーシアムのメンバーが 共同で取り組んだ活動

④子どもと漁村

漁師が漁の際に用いているロープワークを小学生が習得する活動や、鮭の観察、自分達で釣り竿を作って釣りをする活動を行った。観察や釣りの指導には地元の漁師のサポートを頂いた。

⑤酪農村と漁村

身近な生き物の理解や関心を高める為、酪農村と漁村に共通して生息しているヒグマとホタルという2つの野生生物をテーマに、専門家を招いて講習会を行った。

⑥子どもと酪農村

酪農地帯にあまりなじみの無い小学生を対象に、牧草地でのマウンテンバイクや冬のソリ遊び、乗馬など酪農地帯ならではの体験を行った。活動に利用した牧草地の提供や案内役など酪農家のサポートを頂いた。

⑦子どもと漁村と酪農村

廃校を使った子どもキャンプや、湿原と漁業の繋がり調査の報告会など、子どもと漁村と酪農村を繋げて、すべてのコンソーシアムメンバーが関わることのできる事業を行った。

⑧ワークショップとエコツアー

コンソーシアムのまとめの事業として「伝えたい浜中町の魅力」をテーマに、ワークショップにてアイデア出しを行い、メンバーが案内するというモニターツアーを行った。コンソーシアムメンバーがガイド役や参加者となって実施した。

プロジェクトのスケジュール

取り 組み	h24年			h25年							
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
②		○				○					
③			○	○	○	○	○	○			
④	○					○	○				
⑤	○					○					
⑥						○				○	
⑦				○			○	○		○	
⑧							○	○			○

①きりたっぷ子ども自然クラブ

湿原や森林などの自然や、漁業と酪農の 2 つの産業がベースとなった環境教育プログラムを計 15 回開催し、森林や湿原など様々な自然体験のフィールドの中で、発見や気づきの機会を提供し、自然に対する愛着や自然保護感を育てることが出来た。

また、他の学校との繋がりが作りづらい環境の中で、学区を越えた新しい友達づくりの場としても機能し、コミュニケーション能力の向上にも役立てる事ができた。

活動例①初夏の野草を頂きます！

- 実施日：6月3日
- 人数：19名（ボランティア4名）

身近な食べられる野草をテーマにした活動を行った。ヨモギやアサツキなどの植物を採取して、野外で調理して昼食で食べた。



活動例②目指せ、野鳥の達人！～身近な鳥～

- 実施日：7月22日
- 人数：14名（ボランティア2名）

道東には国内の半数以上の鳥類がいるにも関わらず、野鳥についての観察会が行われていない現状から、普段身の回りにいる鳥をテーマにした観察会と生態を伝えた。



活動例③モモンガのお家づくり！

- 実施日：11月4日
- 人数17名（ボランティア2名）

エゾモモンガの生態を知る為のプログラムを行った。エゾモモンガの巣箱を継続的に設置している森で、生息状況の確認や新しい巣箱の設置などを行った。



きりたっぷ子ども自然クラブ 2012年度年間スケジュール

活動回数：計 15 回

参加者数：計 182 名

回数	日程	活動内容	参加人数
1	4月22日	春の生き物調査隊！	18名
2	5月27日	タンチョウってどんな鳥か知ろう！	11名
3	6月3日	初夏の野草をいただきます！	19名
4	6月24日	タンチョウの食べ物を川で観察しよう！	9名
5	7月15日	マウンテンバイクで町内探検！	10名
6	7月22日	目指せ、野鳥の達人！～身近な鳥～	14名
7	8月7～9日	廃校キャンプ！	19名
8	9月23日	無人島探検！	18名
9	10月7日	ケンボッキ島クリーン作戦！	12名
10	11月3日	ロープワーク講座！①	6名
11	11月4日	モモンガのお家づくり！	17名
12	11月18日	ロープワーク講座！②	7名
13	12月2日	ロープワーク検定！	15名
14	12月23日	クリスマスクラフト！	13名
15	3月10日	みんなでやろう、昔の遊び	4名

②緑の回廊

植樹地の下草刈り

- 実施日：6月2日
- 人数：酪農家11名

これまでに植樹を行った2か所の下草刈りを行った。ボランティアで下草刈りに参加した酪農家と共に笹の繁茂が予想以上に早い事と、エゾシカの食害が多く見つかった事を確認し、来年度以降の植樹やシカ対策などの対応を話し合った。

特にエゾシカの食害は被害がひどく、改めて自然環境を復元していくことの難しさをボランティアと共有し、今後の植樹をする上での意見を出し合い、苗木をネットで囲うといった対策を決めた。



牧草地への植樹

- 実施日：10月28日
- 人数：酪農家13名

ミズナラの苗木300本の植樹を実施した。植樹地の笹を刈り、苗木を植え、ネットで苗木一本一本を囲い、エゾシカの食害対策を行った。

ボランティアの声

植樹や食害対策を実際に体験してみると、自然との関わり方が難しく、また労力が掛るかが分かった。自然環境と人との折り合いを付けていくことが大切だと思う。



③海と湿原の繋がり調査

協力者：道立総合研究機構林業試験場 長坂晶子氏・長坂有氏

浜中漁業協同組合、浜中町水産課

琵琶瀬地区漁業実行組合、町民調査補助ボランティア（一般および霧多布中学生）

北海道大学水産科学研究院 門谷茂教授グループ

湿原河川の定期採水調査

●実施日：2012年7月23日・8月24日・9月20日・10月16日・11月23日

●人数：1～2名（担当職員1名、7月は一般調査補助ボランティア1名）

●場所：霧多布湿原河川および対照区とした河川の上～下流全15地点

●内容と成果

毎月1回、湿原と対象河川の上～下流全15地点で採水し、林業試験場において水質検査を行った。検査の対象は、全鉄（鉄イオン）、二価鉄、溶存有機炭素、硝酸態窒素、アンモニア態窒素、リン酸態リンの6項目とした。現時点でのまとめとして、溶存炭素、鉄濃度の高さや分布からみて、沿海州のように、森林－湿原による腐植酸、鉄イオンの供給システムが維持されていると予想できる。

第2回琵琶瀬湾内調査とカヌーでの琵琶瀬川調査

●実施日：2012年8月4日・8月5日

●場所：霧多布湿原 琵琶瀬河口部～中流部の区間 および 琵琶瀬湾内

●人数：10名（担当職員1名、北大院門谷教授グループ5名、琵琶瀬の漁師 齋藤春樹氏と根竹久男氏、林業試験場長坂氏2名）

●内容と成果

8/4に北大院門谷教授グループと琵琶瀬実行組合の協力を受け、琵琶瀬湾での採水と採泥を行った。また8/5にはカヌーを用い、琵琶瀬川河口部から中流部までの採水を行った。

秋のつながり観察会

●実施日：2012年11月10日

●人数：6名（林業試験場長坂氏2名、担当職員1名、他職員1名、一般参加者2名）

●内容と成果

パックテストを用いて、湿原河川の湧き水や流水、湿原の溜まり水に含まれる鉄分や有機質などの濃度を調べた。森や湿原と海の関係について解説を受けながら、湿原を散策した。

●参加者の声

フォーラム参加者からは、「難しそうな内容を分かりやすく説明されたため、自分にも理解でき大変面白く拝聴した」「まず基調講演があったので、その後の調査報告が非常にすんなり理解できた」という声があった。

④子どもと漁村

子ども達の先生役として、また活動のサポートスタッフとして町内の漁師に関わってもらった。漁業の技術や専門知識を子どもに伝える為、遊びを通じて子ども達に伝えられるプログラムとなるよう打ち合わせの段階から意識し、当日の進行では漁師と子どもの橋渡し役になるように注意しながら活動を行った。また漁師と子どもの相互に良い効果がうまれるように、自己紹介や仲良くなるアイスブレイクなどの時間を意識してとった。

ロープワーク選手権

●実施日：11月3日

●実施日：小学生6名（ボランティア1名）

漁師から、実際に漁で使用しているロープワークを教えてもらって身につけ、遊びに応用する活動を行った。漁師さんから様々な漁の話聞くことや、ロープワークの習得を通じて、漁業への関心を持ってもらうと共にロープで出来る遊びを習得することができた。



釣りキャンプ！

●実施日：5月19、20日

●人数：20名（ボランティア4名）

自分の釣竿を作って、海や川で釣った魚を食べるキャンプを実施した。活動のサポートを漁師にお願いし、釣りをする際の海や川での注意点や魚のいる場所といった説明を担当してもらった。子ども達にとっては、漁師から聞く話は新鮮だったようで、真剣に聞く姿が見られた。



突撃！サーモン調査隊！

●実施日：10月8日

●人数：14名（ボランティア3名）

川を遡上する鮭を観察するプログラムを実施した。河口部から上流部の中で、観察ポイントを4か所設定し、鮭の生態や生息する環境などの説明を行った。

また、漁師からは、鮭漁の話を中心に、鮭の種類や回遊の動き、漁の方法などの話を聞いた。



⑤酪農村と漁村

ヒグマ講習会の開催

財団法人知床財団より、専門家を招いたヒグマ講習会を実施した。過去にヒグマによる事故が町内で起こった事もあり、身近に生息しているヒグマに対する過度の警戒心や恐怖心があることから、正しい知識を得ることを目的としたヒグマ講習会を実施した。

開催にあたっては、小学校と霧多布湿原センターを会場に実施し、ヒグマの生態や出会った時の対処法などを学んだ。

- 実施日：5月27日
- 人数：参加者：21名
- 場所：霧多布湿原センター

- 実施日：5月28日
- 人数：25名
- 場所：姉別南小中学校



ホタル講習会

- 実施日：10月31日
- 人数：11名

専門家を招いたホタルの勉強会を開催した。身近な生き物であるホタルの産卵場所、発光の構造、ホタルの好む環境などの生態を学んだ。

参加者の声

毎年見ているが、幼虫時代のホタルや光らないホタルなどの種類の話が新鮮で面白かった。来年子ども達とホタルが見られた時に教えてあげたい。

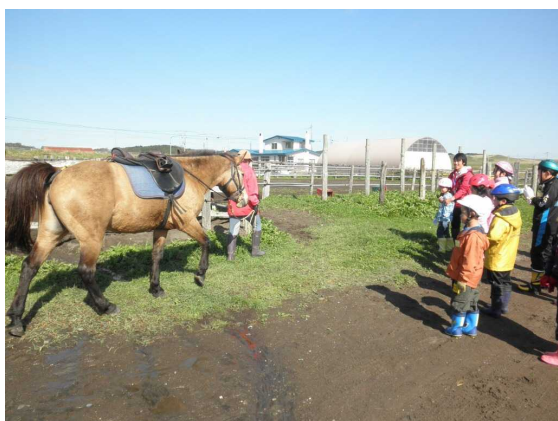


⑥子どもと酪農村

乗馬体験

- 実施日：10月14日
- 人数：16名（ボランティア：3名）

浜中町ならではの体験を子ども達に提供したいという地域住民の思いから、乗馬体験を行った。安全に乗れるよう指導した後、一人一人が手綱を握って乗馬を行った。また、馬が移動や運搬手段の為に各家庭で飼われていた時代があった事を、ボランティアで参加した地域住民から聞く機会を作り、郷土学習の要素も組み込まれたプログラムとなった。



牧草地で雪遊び

- 実施日：2月24日
- 人数：14名（ボランティア：2名）

牧草地でソリ遊びや雪合戦などの雪遊びを行った。近年では子ども同士や大人が子どもと接する機会が減少していることから、雪遊びをする機会が少ない。普段見慣れている牧草地も、雪遊びのフィールドとしては新鮮だった様子で、子ども達は活動を楽しんでいた。

ボランティアの声

「牧草地は、我々酪農家にとっては当たり前の風景や場所だが、子ども達の遊び場として使ってもらえて嬉しい。来年も継続してほしい。」



⑦子どもと酪農村と漁村

廃校キャンプ！

- 実施日：2012年8月5～7日
- 場 所：貰人小学校
- 人 数：35名（小学生19名、中高生ボランティア11名、大人ボランティア5名）
- 活動のねらい

- ①集団生活による協調性と、自然体験による環境への興味を引き出す
- ②地域住民と子ども達との交流によって、新しい繋がりや価値観の変化を作る
- ③地域間の垣根を越えた仲間づくり

●実施内容

沿岸部の漁師町の廃校を活用して、2泊3日のキャンプを実施した。地域の食材を利用した料理や、近くの浜辺で拾った石を使ったストーンランタンの制作など、地域の事を知る為のプログラムを中心に活動した。食事の準備や遊びの内容を一緒に企画するなど、共同生活を通じた仲間作りの時間を多くとった。また、地域の方と一緒に食事をとったり話を聞いたりするなどの交流を行なった。

●成果

酪農村や漁村といった地域を越えた子ども同士の交流を行うことができた。これにより、今までにない子ども同士の関係性が出来たと共に、保護者同士の交流や地域との繋がりがうまれた。

事前に中高生のボランティアと打ち合わせを行い、プログラムの進行や班のリーダーになってもらうことで、責任感を養うと共に将来のプログラムの担い手としての育成も行い、ボランティアとしての自覚を持って取り組めるようにした。



繋がり報告会

「海と湿原のつながり調査報告会および座談会」

- 実施日：2012年12月16日（日）13:30～16:30
- 場 所：浜中漁業協同組合研修室
- 人 数・27名（担当職員1名、他主催者側6名、一般参加者18名、調査専門家2名、講演者1名）

●フォーラムの内容

①基調講演－『オホーツク・アムールプロジェクト』

白岩孝行氏（アムール・オホーツクプロジェクトリーダー。自然地理学者、雪氷学者。北海道大学低温科学研究所准教授）による講演を行った。日中露3カ国の研究者が協同で実施した大規模なプロジェクト「オホーツク・アムールプロジェクト」の成果を軸に、湿原と海の関係、植物プランクトン増殖に働く鉄運搬の仕組み、アムール川流域で起こっている環境変化と海への影響など、霧多布湿原での海と湿原のつながり調査プロジェクトにもつながる内容の講演となった。



②調査報告－『霧多布湿原と海のつながり調査報告』

長坂晶子氏（北海道立総合研究機構林業試験場）による、つながり調査報告を行った。本フォーラムは漁業者を中心とする一般市民が主な対象であるため、本調査の目的や湿原という特殊な環境における鉄や酸素の移動などから丁寧に説明を行い、また調査の成果として得られた、湿原河川での水質調査における、鉄や腐植質の供給源としてみた場合の湿原と森林の特徴、海域調査における浜中湾の特徴、落葉溜り調査における霧多布湿原や道東の湿原河川の特徴を報告した。



③座談会

参加者と情報交換しながら、今年の調査で得た仮説を補強し、来年度の調査計画につなげる座談会を実施した。座談会には、町内の漁業者を中心に、町内のNPO、町内外のガイド業者、浜中漁協職員が参加した。参加した漁業者が長坂氏や他の座談会参加者の疑問に答えたり、異なる地区の漁業者同士で昔の漁場や湿原河川の環境についての意見が交わされたりと、自由な雰囲気の中、意見交換が活発に為された座談会となった。

また参加した漁師からは、過去の文献や生き物についての情報が出てくるなど、貴重な情報収集の場となったことから、引き続き来年度も報告会と意見交換の場を設定することとなった。



⑧ワークショップとエコツアー

●開催の経緯

これまで開催した事業は、今まで各自で行ってきた活動に、コンソーシアムの他のメンバーが参加するというものだった。このプロジェクトの事業が進む中、メンバー間の議論の中で、計画から実施までコンソーシアムのメンバーが新しく作る活動を行ってはどうかという議論があり、ワークショップでのアイデア出しと一泊二日のエコツアーを開催するに至った。

メンバーの多くが、各事業に取り組むにつれ、これまで別々に取り組まれてきた社会教育活動や、産業や年代によって地域や活動そのものをお互いが知らない現状に気付き、自分たちの町の事を自分達を知る必要があるという問題意識を共有したことから、「浜中町の魅力を伝えるエコツアーを作る」というテーマで、エコツアーを作る事を決めた。

アイデアワークショップ①

●実施日：11月26日

●人数：17名（地域住民13名、大学生4名）

●場所：霧多布湿原センター

●進行：北海道教育大学釧路校 平岡修一氏

●目的と内容

エコツアーの資源となる浜中町の魅力探しを、立場が違う地域住民や外部の人材とが話し合うことで、改めて自分達の町の魅力に気付く。

手法：このプロジェクトの概要を改めて説明した後に、2グループに分かれて、浜中町の魅力を伝えるエコツアーのアイデア出しを行った。グループはなるべく立場の違う人達が一つのグループになれる様、事務局側で考えておいた。

2つのグループには、それぞれ酪農家、漁師、大学生が入り、各自が思う浜中町の魅力をポストイットに書き出し、KJ法によって分類して発表を行った。



グループ①



- ・湿原の動植物の本作り ・アンモナイト探し ・星空のツアー ・吹きだまりツアー
- ・雪原お月見散歩 ・寒さ体験 ・氷切沼で切り出し競争 ・野外ナイトシアター
- ・ムツゴロウ王国 ・マウンテンバイクキャンプ in 浜中 ・歩くスキーで湿原横断
- ・無人島まで歩いていくツアー ・直線体験ツアー ・ホーストレッキング1週間ツアー
- ・マラソンツアー ・秋鮭一本さばいて食べる ・果実酒づくり ・鮭トバ作り・潮干狩りと地元の食事 ・山菜採り ・秋鮭釣りツアー ・アメマスフィッシングダービーツアー
- ・川釣りツアー ・幻のイトウ釣り ・船かイカダで川下り ・船で岬をクルージング ・遊漁船 ・本気のこんぶ漁ツアー ・ウニ祭り ・魚のあみはずし ・ウニ潜水漁師とダイビング ・鹿ハンティング見学ツアー（解体も） ・ツリーハウス ・一番高い場所発見 ・チェーンソーで木を切る ・牧草地のフンを踏まずに歩くツアー
- ・引きトラクターで牧草地を走る ・牧草地で迷路作り ・牧草地でキャンプ ・除角ツアー ・牧草プールで草の海を泳ぐ ・雪の迷路づくり ・牛にミルクをあげる
- ・ロープワーク ・スノーモービルで牧場一周 ・牧草地サッカー ・牧草をフォークでつむ

グループ②



- ・ホッキ拾い ・タコ壺作り ・カニカゴ修理体験 ・漁網修理 ・密漁ドキドキツアー
- ・ウニツアー 食べる見る ・ウニ養殖場の下に集まるチカ釣り ・味覚ツアー ウニやカキ
- ・牧草ロール作り ・酪農体験 ・ロールころがし ・最新機器酪農ツアー
- ・トラクターに乗ろう ・雪だるま大会 ・林道トレッキング 。冬のお月見
- ・フットパス作成 ・となりのお庭見ツアー ・鹿と走り回る ・湿原の上を走る
- ・湿原屋形船ツアー ・耐寒ツアー (湿原や牧草地) ・ホームステイ ・スタンプラリー
- ・出漁お見送りとお出迎え隊の結成 ・てがら作り ・昆布干し体験 ・昆布ほし場に寝転がる
- ・昆布加工体験 ・工場見学 ・社会見学ツアー ・昔の暮らしツアー
- ・島見学 ・海水浴 ・馬のツアー ・ロープワーク ・ツリークライミング
- ・気球に乗る ・漁船に乗る サーフィン ・成人式ツアー ・スナックツアー
- ・鹿猟同行ツアー ・海や川でカヤックツアー ・洞長で海岸散歩 ・野外星空観賞
- ・部活の遠征の受け入れ

アイデアワークショップ②

- 日程：12月19日
- 参加者：10名（地域住民7名、大学生3名）
- 場所：霧多布湿原センター
- 進行：北海道教育大学釧路校 平岡修一氏
- 内容

前回のワークショップで出てきたエコツアーのアイデアを元に、体験内容の絞り込みや1泊2日のツアーのスケジュール化、当日の役割分担などの具体的な話し合いを行った。現役のガイドがワークショップの参加者の中にいたことで、内容を詰め込みすぎないように注意した方が良い、移動中のトイレの場所を事前に確認しておくことなどの具体的なアドバイスを聞くことができた。2日間のトータルコーディネートビジターセンター職員が行い、サポートして地域住民にガイドや食事を担当してもらうことで合意した。ガイド役となる地域住民の協力を募ることでワークショップを終えた。

また、2回のワークショップの大きな成果として、漁村と酪農村ではお互いの産業や地域の事を知らないことに気付くことが参加したメンバーと共有できた。当初はエコツアーの対象を大学生と想定していたが、コンソーシアムのメンバーを含めた地域住民にも参加を呼び掛けることにした。






エコツアーの開催

- 実施日：2013年3月2、3日
- 人数：19名（北海道教育大学釧路校 8名、酪農家6名、漁師5名）
- テーマ：「地元人が教える、浜中町の海も山も楽しめるエコツアー！」

3月2日

酪農地帯と湿原ツアー

<p>9:30 霧多布湿原センター 自己紹介、ツアーの目的、2日間の行程説明</p>	
<p>10:40 松岡牧場 地域のガイドさん紹介 スノーモービル体験 スノーモービルの解説、注意事項の説明</p>	
<p>12:00 昼食 エゾシカのバーベキューを囲んで、スノーモービルツアーなどの感想を聞いた。その後、手作りアイス体験を行い、地域の子も達と一緒にアイスを作った。</p>	
<p>14:00 霧多布湿原センター 霧多布湿原の中を流れる凍った川を、歩くスキーで散策した。途中オジロワシやオオハクチョウなどを見る事が出来、浜中町の雄大な景色を楽しんだ。</p>	
<p>17:30 チェックイン</p>	

●3月3日

漁業地帯のウニと昆布のツアー

<p>09:00 チェックイン 流れの説明、出発</p> <p>09:20 ウニ養殖場</p> <p>浜中町の養殖ウニの説明から始まり、なぜ美味しいのか、エサの昆布はどのようにあげるのかなどの説明を行った。</p>	
<p>11:00 ウニ加工センター</p> <p>養殖ウニの加工センターで、ウニ剥き体験を行った。ウニの「腹と背」の説明や、専用器具の使い方、身の取り出し方などを習った上で、実際に体験した。</p>	
<p>12:00 昆布小屋</p> <p>昆布を収納している小屋の中を見学した。浜中町で採れる昆布の種類や味の違い、品質管理などの話を聞いた。</p>	
<p>12:00 昼食</p> <p>13:00 ディスカッション</p>	
<p>14:10 終了</p> <p>15:05 茶内駅</p>	

参加者の感想

●大学生

・自分たちの町の話を楽しそうに話している人が何人もいたことが、とても印象にのこっている。特にウニツアーの漁師さんが、自分が育てているウニを誇らしげに話していて素敵だった。

・知らないことばかりだったので新鮮だった。特にスノーモービルの体験は、体験自体も楽しく、牧草地の一面真っ白な世界がとても魅力的だったので、同級生を誘ってもう一度参加してみたい。

・あまり地域の人と交流をする機会がないので、話したり食事を一緒にしたりすることがとても楽しかった。皆さんとても温かく迎え入れてくださり、すぐに仲良くなれた。

●漁師

・スノーモービルに初めて乗った。今回のツアーで、自分達の暮らしを楽しんでいる酪農家の皆さんと初めて接して価値観が少し変わった。漁師は少し真面目すぎるのかも知れないと思った。

・冬になるとあまり酪農地帯には行かないが、改めて案内されると綺麗な景色があることに気付かされた。そういった事は、大学生が感動している姿を見て特に気付かされた。

●酪農家

・ウニや昆布がこんなにも手が掛けられて生産されている事を知らなかった。自分の住んでいる町なのに、酪農地帯以外の事はまだまだ知らない魅力や取り組みがあることを知ることができた。

・自分達には当たり前の事でも、町外の人には魅力的に思えることがいくつもあることが分かった。牧草地を見て感動している学生には驚いた。少し身の回りの自然や産業を見る眼が変わったように思う。町外の人々と交流する機会があればまた案内したい。

第三章 中高生ボランティアの育成

将来の地域活性化や環境教育活動の担い手として、中高生ボランティアの育成を行った。ボランティアは、きりたっぷ子ども自然クラブの会員で中学生になる子どもや町内の中学・高校の生徒への呼び掛けにより募集した。

ボランティアの目的

- ①子ども達のリーダーとしての役割をもってもらうことで、リーダーシップを発揮し、将来のまちづくりを担う人材へと育てる
- ②環境ボランティアや専門家の調査の手伝いをするすることで環境意識を高める。

ボランティアの集い① (スタートアップ講座)

- 実施日：2012年4月8日
- 人数：中学生8名

ボランティア同士の顔合わせと役割の共有をする場を作った。自己紹介から始まり、自分の名札作り、年下の子ども達へ向けたアイスブレイクの練習を行った。またそれぞれが想うボランティアの姿を一人一人が紙に書き出して一人ずつ発表した。最後には、よく利用する湿原や森といったフィールドを散策し、道順や危険個所の確認を行った。



参加者の声

- ・違う学校の子ばかりで最初は不安だったけど、ゲームや散策をするうちに打ちとけることが出来た。最後にはあだ名で呼び合えたので良かった。これからボランティア活動で会えると思うと楽しみ。
- ・外で遊ぶのが好きなのでボランティアに登録した。親にも積極的に参加したほうがよいと言われており、部活動もやっていないので、出来るだけ参加したい。
- ・ボランティアには興味があったが、何をして良いのか分からず参加するまでは不安だった。スタッフの人に、特別な事をしようとせずに、まずは子ども達を見るだけで良いと言われて少し楽になった。

ボランティアの集い② (釣りキャンプ準備)

●実施日：2012年5月13日

●人数：中学生5名

釣りキャンプの活動前に、当日のスケジュールの共有と必要な技術習得を目的に実施した。スケジュールの共有では、各ボランティアの役割分担や当日の流れを確認した。また、子ども達に指導できるよう釣竿の作り方、薪割りなど必要な作業を体験し、難しい作業はキャンプ当日までに家で練習してくなど、主体的な動きが見られた。



参加者の声

- ・釣りをしたことが無かったので不安だったが、やってみたら簡単で楽しかった。釣竿の作り方も子ども達に上手に教えられたと思う。
- ・魚や生き物が苦手な不安だったが、火おこしの役割をやった。小学生が楽しそうに活動をしていたので、次回は釣りをしたり、魚をさばいたりしてみたい。
- ・すぐそばの川にこんなにも魚がいる事を知らなかった。作った釣竿で家の近くの川でも釣りをしてみようと思う。

ボランティアの集い③ (廃校キャンプ準備)

●日程：2012年7月29日

●参加者：中学生7名

廃校キャンプの活動の為に打ち合わせを行った。肝試しや外遊びの企画など、企画から実施までボランティアに任せる事を大幅にスケジュールにいれ活躍の場を作ることで、より実践的にボランティアの育成を行った。



参加者の声

- ・事前に参加したボランティアの集いで、スケジュールや役割分担を確認していたので、子どもと一緒に楽しく活動することができた。
- ・2泊3日のキャンプには行ったことがないので不安だったが、役割がたくさんあり、共同生活も楽しいことが多かったので、あっという間に終わった感じがする。
- ・今までの日帰りの活動よりも一緒に過ごす時間が長くて、食事や遊びの活動などを通じて仲良くなることが出来た。
- ・他の学校のボランティアとも仲良くなれる機会になってよかった。
- ・とても楽しい活動で、弟を誘ってまた来年も参加したい。
- ・廃校の地域の人に食事を一緒に作ってもらったが、優しく教えてもらえたのと、作った料理を美味しいと言ってもらえて嬉しかった。

落葉だまり調査

●実施日：2012年11月11日

●人数：10名

(長坂氏2名、担当職員1名、他職員2名、一般参加者1名、霧多布中学生4名)

繋がり調査の一環で、川底にたまった落葉を採取し、室内で樹種の選別を行った。調査には、漁村の中学生4名が参加し、胴長を履いて川に入り、落ち葉を救う作業の補助や、選別作業の手伝いを行った。



参加者の声

- ・家にいるよりも外で過ごす方が好きなのでボランティアに参加している。一番印象に残っている活動が、川での調査の手伝いで、初めて胴長を着て川の中に入ったり、落ち葉をすくって観察したりする作業が楽しかった。調査の先生に色々と聞くことが出来て、調査という仕事自体にすごく興味がわいた。
- ・調査のボランティアと聞いて、どんな事をするのか分からず参加した。初めて聞くことばかりで、難しいことが多かったけど、何でも知っている調査の先生がかっこよく見えた。
- ・胴長を着たのも初めてだったし、川の中を歩くのも楽しくて、参加して良かった。

第四章 アンケート結果と報告会

身の回りの自然に関する関心度を測るアンケートと、このプロジェクトの目的である浜中町の地域活性化や環境教育に関する意識調査アンケート調査を行った。

4-1 身近な自然に関するアンケート

① 酪農地帯でのホタルアンケート調査

配布：230

回収：60

● アンケートの目的

・「最近ホタルをめっきり見なくなった」という酪農家の言葉をきっかけに、全国的に減少しているホタルの目撃情報の収集を目的に実施した。年代によってホタルに対する度合いが違うことから、過去の目撃情報を同時に集めた。
・ホタルという象徴的な生物の目撃情報を集める事で、身近な自然に対する関心を高める。

● 2012年の目撃情報

32件（20地域）：時間帯は19～20時に

● 過去の目撃場所

14件（11地域）：年台：昭和40～50年 6件、平成元年～昨年 8件

● アンケート後の反応

「自分の町にホタルがいることを知らなかった」

「そういえば、最近ホタルを見ていない。昔は近くの川でたくさん見られたのに」

「子どもの頃は毎年お盆になるとホタルを見ながらお祭りに行っていた」

「子どもに見せたいがなかなか見られない。どこで見られるのか教えてほしい」

本アンケートは、次年度以降も継続して行い、情報の精度を上げると共に身近な自然への関心を高めていく。

FAX: 0153-65-2774

☆ホタル一斉調査☆
～浜中町のホタルは本当に減ったのか?～
アンケートにご協力ください。

今年見た場所は?

○名前： _____

○住所： _____

○見た場所： ・家の周り
 ・その他 _____

○何匹いた? 1～5匹 ・ 10匹 ・ 20匹 ・ 数えられない

○見た日にち： _____ 月 _____ 日 _____ 時ごろ

.....

昔見たことがある場所は?

○どこ? _____ 集落の、 _____ のあたり

○いつ?

[昭和30年以前・昭和40年・昭和50年・昭和60年・平成元年～現在]

結果は緑の回廊通信などでお知らせします。

浜中町酪農村 緑の回廊づくり事務局：浜中町農業協同組合
緑の回廊にご登録ください。現在 105戸、登録面積 2164ha
送り先：霧多布温泉センター
TEL:0153-65-2779 FAX:0153-65-2774

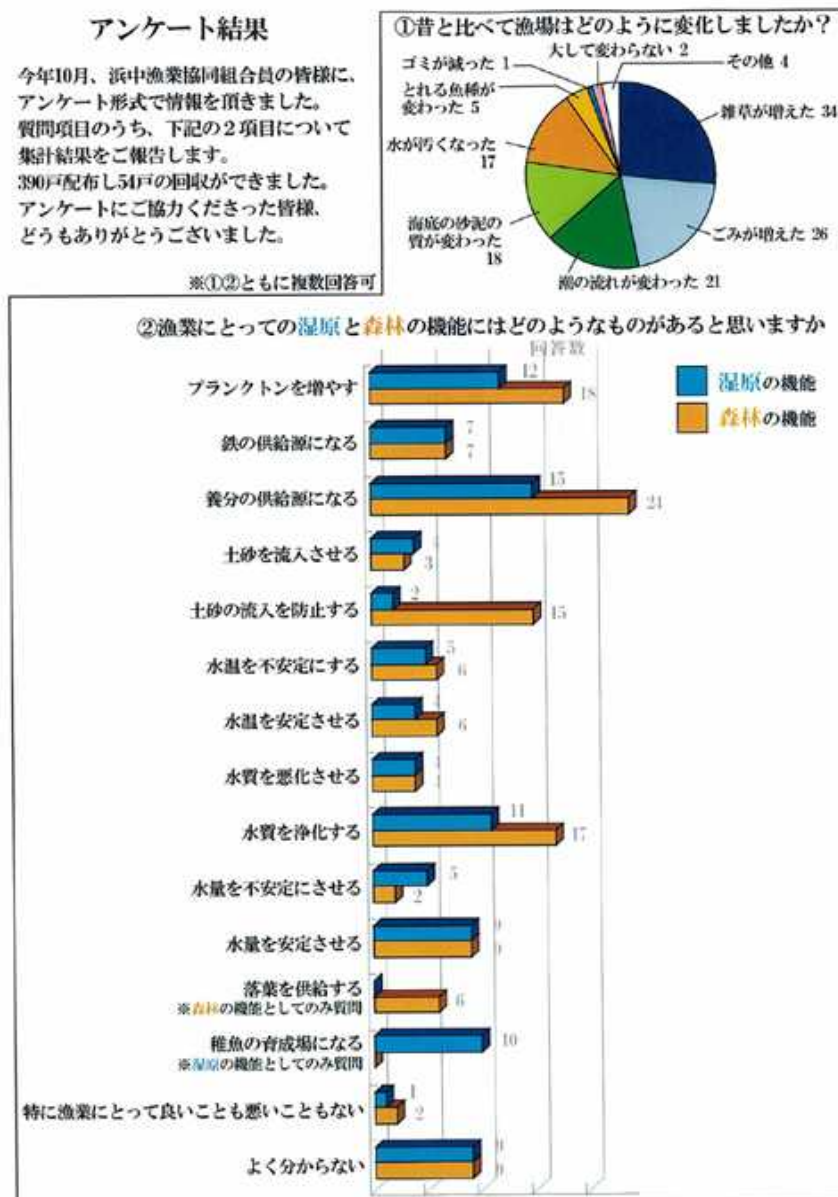
②漁業地帯での湿原と海の繋がりアンケート

配布：390

回収：54

●内容と成果

浜中漁協を通して組合員全戸対象に、湿原の機能や漁場の環境変化、湿原と森がそれぞれ海に果たす役割についての意識を調べるためのアンケート調査を行った。アンケート結果からは、森林の機能については見聞きしているが湿原については漁業に+の効果をもたらすものとの評価があまりされていないことが明らかになった。



4-2 地域活性化・環境教育プロジェクト アンケート調査

調査の目的

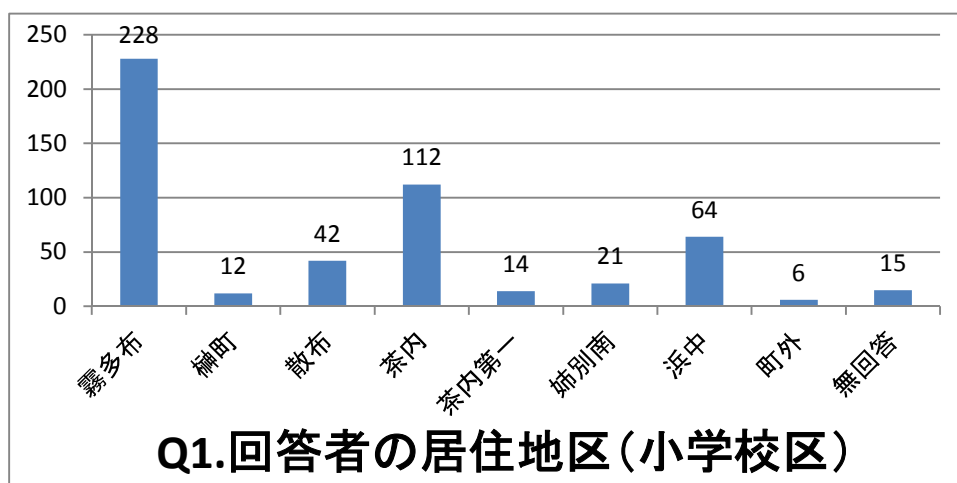
- ・第一に、浜中町の住民（特にお仕事をされている方）の環境保全、地域活性化・まちづくりに対する考え、取り組みの状況などについて把握することを目的としている。
- ・あわせて、本調査で明らかになった事項を、今回のコンソーシアムの評価や今後の浜中町における環境保全、地域活性化・まちづくりの取り組みの方向性、戦略について考える際の基礎データとして活用することを狙いとしている。
- ・このアンケート結果を元に、今年度のコンソーシアムの活動を振り返る

基本データ

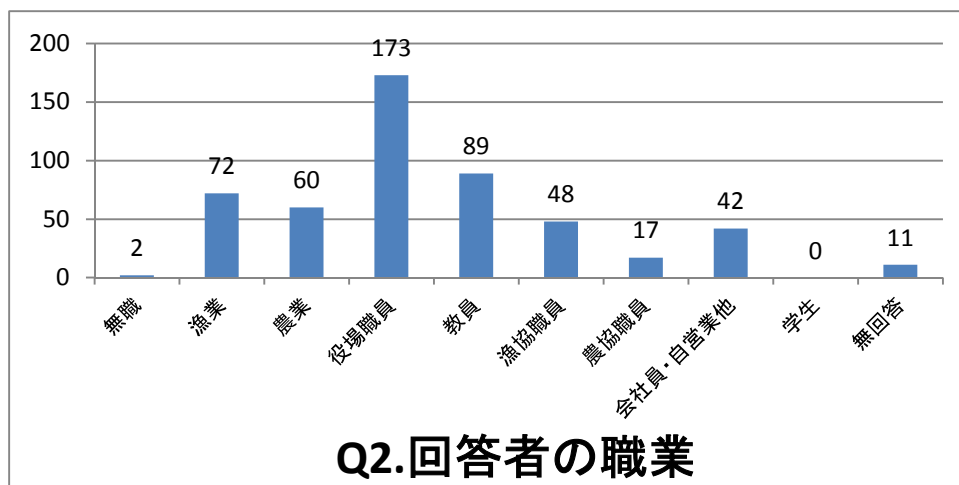
- ・実施期間：2012年9月～11月
- ・実施方法：町役場、JA浜中、漁協（浜中、散布）、商工会、教育委員会に対して、職員、組合員への調査票の配布を依頼、回収
上記の配布方法により、コンソーシアムメンバーである、酪農家、漁師、子どもへのアンケートが可能となった。
- ・配布数：989
- ・回収数（率）：513（51.8%）

Q1. 回答者の居住地区

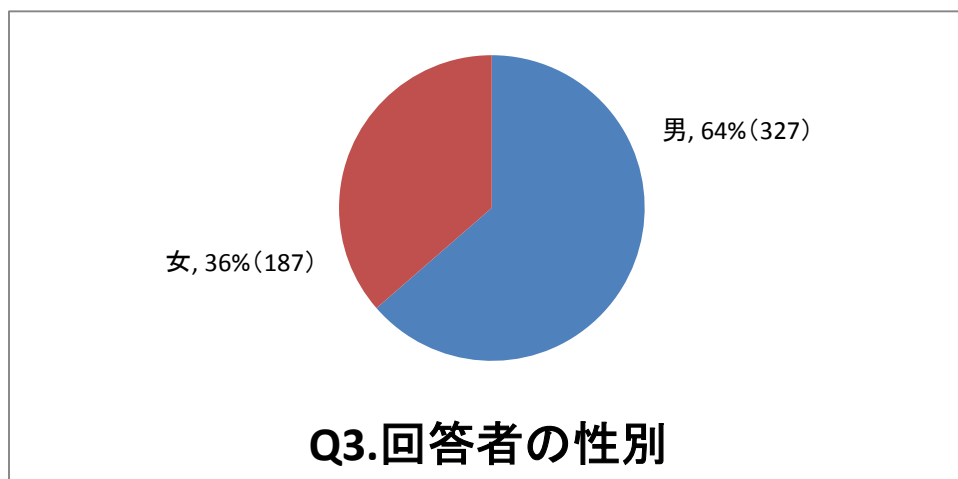
回答者の居住地区を小学校区（2012年4月時点）に分けた。



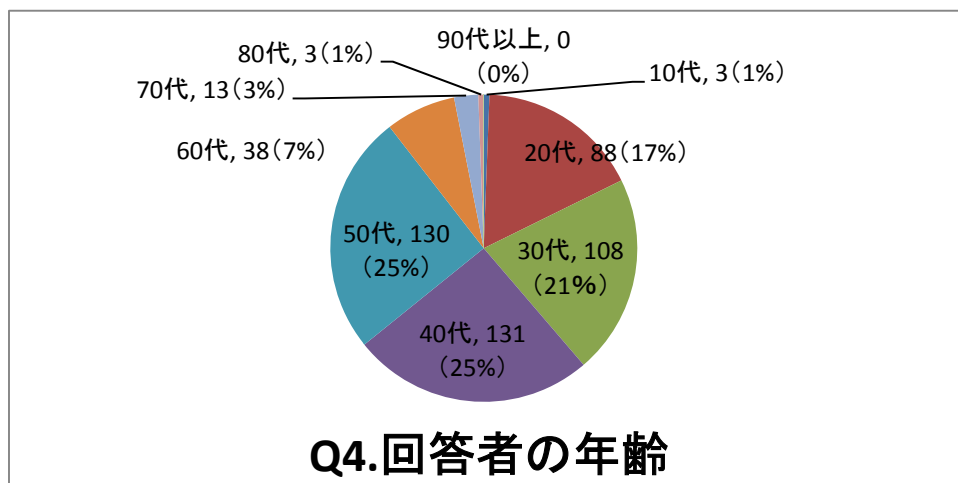
Q2. 回答者の職業



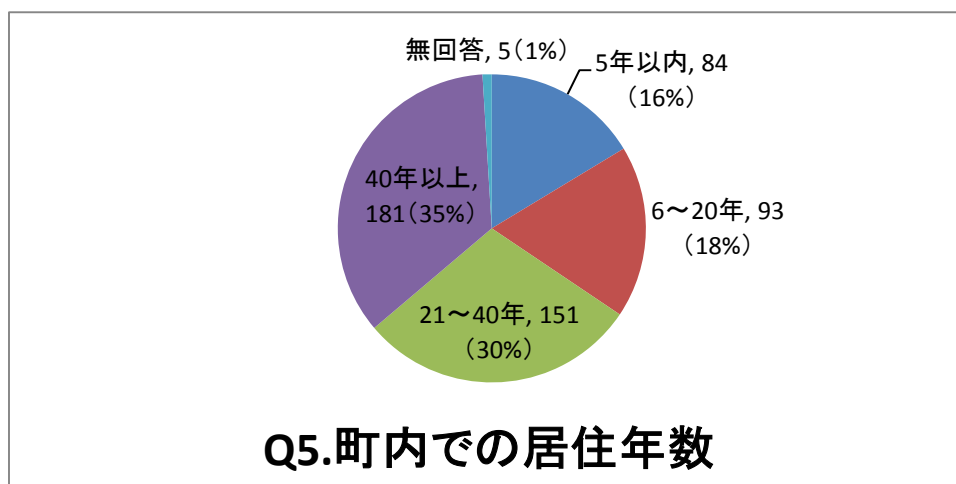
Q3. 回答者の性別



Q4. 回答者の年齢

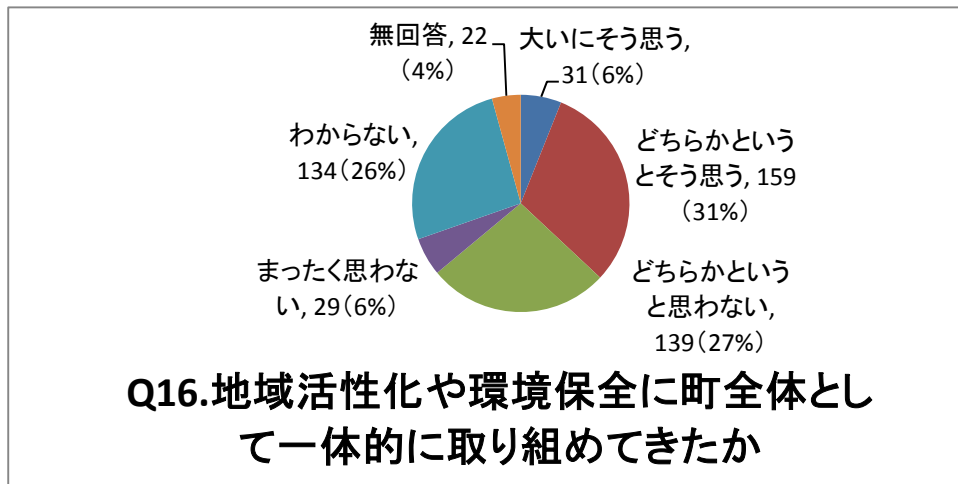


Q5. 浜中町での居住期間



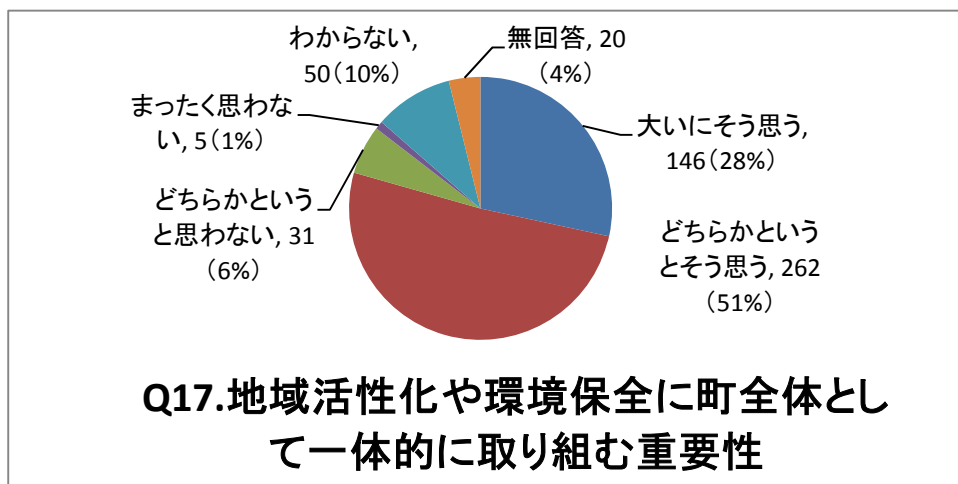
Q16. 浜中町内での異なる業種・地区を超えた地域活性化、環境保全活動の状況

これまで浜中町において、地域活性化や環境保全などの活動を、異なる業種や地区を超えて町全体として一体的に進めることは多かったかと思うか聞いた。最も多かったのは「どちらかというと思う」(31%)だった。しかし、「どちらかというと思わない」が27%、「わからない」が26%と、異なる考えの回答も多く、意見が割れていることが分かった。



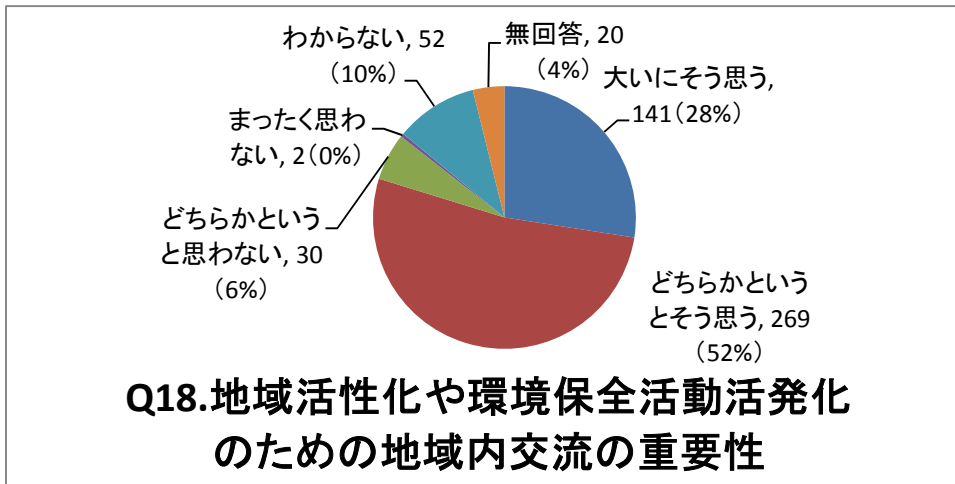
Q17. 異なる業種・地区を超えた地域活性化、環境保全活動の重要性

浜中町内において、地域活性化、環境保全活動を、異なる業種や地区を超えて町全体として一体的に取り組むことが重要と思うか聞いた。「どちらかというと思う」(51%)、「大いに思う」(28%)を合計すると、8割近くの住民が、程度に差はあるものの一体的な取り組みが必要であると考えていることが分かった。



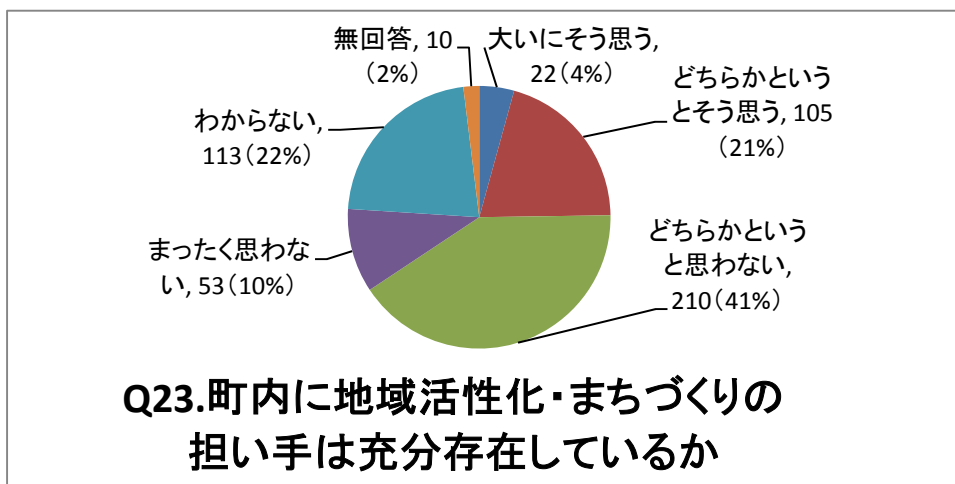
Q18. 異なる業種や地区の組織・人材が交流する機会の重要性

浜中町内において、地域活性化や環境保全活動を活発化させることを目的に、町内の異なる業種や地区の組織・人材が交流する機会をもつことは重要かどうか聞いた。「どちらかというと思う」(52%)、「大いにそう思う」(28%)を合計すると、8割の住民が重要と考える傾向にあることが分かった。



Q23. 浜中町の地域活性化・まちづくりの担い手の存在

現在、浜中町の地域活性化やまちづくりの担い手となる組織・人材は充分存在していると思うかどうか質問した。その結果、「どちらかというと思わない」が41%と最も多かった。「まったく思わない」(10%)と合わせると、5割の住民が担い手は充分存在していないと考える傾向にあることが分かった。また、「わからない」と回答した住民も22%と少なくない。



※本アンケートの結果は別紙参照

4-3 報告会と全体の振り返り

これまでの活動やアンケート結果を共有する報告会と全体の振り返りを行った。コンソーシアムのメンバーすべてが集まり、現在の課題の共有や今後のコンソーシアムの方向性などを話し合った。

●日時：2月21日

●場所：霧多布湿原センター

●参加者

浜中町まちづくり課 越田課長

浜中町農業協同組合 高橋参事

散布漁業協同組合 西田専務

浜中町漁業協同組合

漁師 渡部、酪農 山村

霧多布湿原ナショナルトラスト 3名

理事長 三膳、副理事長 瓜田、

北海道教育大学釧路校 平岡先生、学生3名

●内容

全体の活動報告があった後に、地域活性化・環境教育プロジェクトのアンケート結果をアドバイザーの平岡氏よりご報告頂いた。

特にQ17「異なる業種・地区を超えた地域活性化、環境保全活動の重要性」の設問では、ほとんどの町民が一体的な地域活性化の取り組みが必要であると回答している事を確認し、このプロジェクトが住民のニーズにも合っていることを確認した。

その一方で、Q23「浜中町の地域活性化・まちづくりの担い手の存在」の設問では、多くの町民がまちづくりの担い手不足を感じていることから、中高生ボランティアの育成や、ワークショップとエコツアーで取り組んだ様な地域活性化事業が求められていることを共有し、コンソーシアムメンバーで来年度以降の事業の課題の一つとして位置付けられた。



第五章 成果と今後の取組

プロジェクトの目的に照らし合わせて、プロジェクトの成果と、なぜこのような成果が出たのかという「成果の要因」についての検証を行った。

5-1 プロジェクトの成果

交流の場がうまれた事による活性化

まず、このプロジェクトでは、これまで出会うことの無い人材が一緒になって事業を行う場ができたことが大きな成果である。

ワークショップとエコツアーの開催においては、今までに共同で事業を行う事が少なかった漁師と酪農家を中心となり、町の魅力を話し合い、エコツアーのガイド役となって実施した。アイデア出しや役割分担などのプロセスの時間を共有し、時間をかけて一つのテーマを話し合うことで一体感がうまれた。

廃校キャンプも同様に、地域住民が一つの事業を開催する為に集まり、役割をもって取り組んだことで、同じような一体感を作ることができた。

このプロジェクトによって作られた地域住民同士の一体感は、これまでそれぞれ取り組まれていた社会教育事業の経緯を考えると、一番の成果だと思われる。

自然環境への理解、気付き

かつての湿原は無用の土地として埋め立てられ、牧草地や周辺住民のゴミ捨て場となってきたが、このような地域において、植樹や海域調査へボランティアとして参加者を得た事自体が大きな成果といえる。ボランティアに参加することで、調査についての難しいというイメージや、植樹などの環境ボランティアにおける一部の人々の活動という印象を払拭し、活動を通じて身近な自然への理解や気付きを得る事が出来た。

また、この様な地域性の中で、アンケートや調査の報告会に参加する住民を得られたことも今まででは考えられないことである。

地域活性化、環境教育の担い手

中学生から大人まで幅広い年代がボランティアとしての参加があったが、特に中学、高校生は将来の地域活性化や環境教育の担い手として育成する為、イベント毎に事前の打ち合わせを徹底した。打ち合わせでは、事業の目的を説明し、「なぜ取り組むのか」という事を一緒に考える事で問題意識を共有することが出来た。

また、事業毎の役割をボランティア一人一人に作り、ボランティアの活躍の場を意識して作ることで、周りから評価してもらい、達成感を感じてもらうことが出来た。この事でより担い手としての自覚を持ってもらえた。

このプロジェクトを通じて、参加率が大幅に上がったボランティアが数人出てきたことや、将来の就職先としてビジターセンターを意識する発言もあった。将来の地域活性化や環境教育の担い手として期待できる。

コンソーシアムメンバーの声

漁師さんの声

普段使っているロープといった道具やそれらを使う技術が、子ども達にとっては遊びの良い道具になるということが分かって、自分自身も面白かった。子どもと接する機会が最近はなかったもので、楽しく活動させてもらった。

打ち合わせの段階では、子どもにどこまでやらせるか、どのような説明が分かりやすいのかなど不安が多かったが、ビジターセンターのスタッフのサポートもあり、なんとか伝えることが出来た。



酪農家さんの声

今回ガイドしてみて分かったことは、普段何気なく見ている日常的な風景が、都会の人から見れば結構特別に見えるということ。そして、酪農以外の事を知らない自分達に気付いた。漁師のウニツアーに同行したが、自分の町で生産されている最高級のウニの事を今まで知らなすぎた。今回のツアーで改めて自分の町を見つめ直す良い機会になりました。



中学生ボランティアの声

班のリーダーになったり、ゲームの進行役をしたりすることは初めてだったので、出来るか心配だったが、他のボランティアの協力もあって、小学生達にも楽しんでもらえたと思う。今まで参加する側だったけど、今回からボランティアになり、参加するだけでは味わえない楽しさを見つける事ができた。



5-2 成果の要因

町の規模

人口約 6,400 人、全世帯数約 2500 戸という浜中町の数は、チラシ配布をする際に、予算的にも負担が少なく、呼びかけやすい数でもある。この事により、様々な活動への呼び掛けや、コンソーシアムでの情報の共有を容易にすることができた。これにより、興味はあるが参加するに至っていない潜在的支援者や、ワークショップやプログラムに参加できなかった人へ、この事業の告知や進行状況を伝える事が可能となったことも、活動の広がりを作る上で重要な要素だったと思われる。

コンソーシアムを作って事業を行う場合、一次産業従事者の多いへき地では、メンバーが集まって打ち合わせを行うことが難しい状況から、いかにして情報を共有し一体感を作るかがポイントとなった。その際に効果的な広報媒体を選んで情報を発信し続ける事が事務局には求められるが、このプロジェクトにおいては、全世帯へチラシを配布しても経費はかからず、有効な広報手段を取ることが出来た。



**海と湿原の
つながり調査プロジェクト**

実施団体：霧多布湿原ナショナルトラスト 協同実施団体：浜中漁業協同組合 浜中町水産課

つながり調査報告会

2012/12/16 (日)

場所 浜中漁業協同組合 2F 研修室
時間 13:00~15:30

霧多布湿原由来の物質が漁業にもたらす効果を具体的に調べるため、2012年から「海と湿原のつながり調査プロジェクト」をスタートしました。浜中町でとれる海産物に「豊かな湿原の恵みを受けた魚介類」として付加価値が付けられることを目指しています。

アムール・オホーツクプロジェクト講演会
白岩 孝行氏 (アムール・オホーツクプロジェクトリーダー、自然地理学者、雪氷学者、北海道大学低温科学研究所准教授)

つながり調査 2012年報告会
長坂 晶子氏 (北海道立総合研究機構 林業試験場)

座談会 参加者の皆様とお話ししながら、来年度の調査計画につなげる座談会です。

この湿原をどうしたらいいか
霧多布湿原ナショナルトラスト

中立的立場としてのビジターセンターの役割

このプロジェクトでは、地域の行政や産業団体とコンソーシアムを形成した。他地域でもこれらの団体は地域活性化の担い手として期待されているが、コンソーシアムなどまとまりのある活動が出来ている地域は少ない。これらの原因は利害関係や地域特有のしがらみといったものが弊害になっていることが多い。

今回のプロジェクトでは、私達のような中立的な立場にあるビジターセンターがコンソーシアムの中心となることにより、同じテーブルで議論をすることが可能となった。地域の事情を理解し、信用のある社会教育施設がコンソーシアムの事務局を担うことは、へき地での社会教育を進める上での一つの手法であることが分かった。

外部の関わり

地域住民だけでは、対立的な議論のまま平行線に終わることや、課題解決に専門性が無い場合があるが、このプロジェクトでは、外部のアドバイザーを斜めからの人材として議論のテーブルに参加してもらうことで、対立軸を無くし、専門性のあるアドバイスを聞くことで解決の糸口を見つけることが出来た。

また、今回のプロジェクトでは、「地域内の外部的人材」の活躍が大きく影響している。これは、移住者やペンションオーナーといった町外の刺激を受けている人材で、これらの人々の持つよそ者の視点により、地域の固定概念を崩し、普段気づきづらい町の魅力を見つけることが出来た。

地域活性化に必要な人材は「よそ者、若者、ばか者」と言われるが、へき地での活動は、内部の人材だけでは息詰まることも多く、このような外部の視点が有効であることが分かった。

地域の共通課題への取り組み

ほとんどの町民の共通テーマである地域活性化や環境教育についての取り組みを行ったことにより、関心を持ちやすく、事業への参加を促す事が可能となりました。この事により今までにない参加者層が集まり、新たな議論や活動へのアイデアが生まれ、活動の広がりがうまれました。

特に子どもの活動においては地域の協力を得やすく、このプロジェクトでは子どもの環境教育が大きな柱の一つになっていることが、多くの地域住民をプロジェクトに引き込むことが可能となった。

5-3 今後の取り組み

コンソーシアムによって新たに生まれた団体や住民同士の繋がりによって、新たな社会教育の繋がり事業が始まることになり、ここに記載する。

①地元の高校をサポート

地元の高校が、来年度より週に1回地元の自然や文化を学ぶ機会を作る授業を開始するにあたって、このプロジェクトがきっかけで繋がった教員と議論を重ね、授業のテーマや内容の議論やアドバイスを行っています。

現在、カヌーや乗馬などの体験の他、地域の大人と高校生を繋げるアイデアを議論している。

②地域住民参加型の情報誌を作る

地域・立場・年齢が違う人々が集まって、地域の情報誌を作る企画が進んでいる。このプロジェクトで出来た繋がりや想いを継続したいという、ワークショップとエコツアー参加者が中心になって、地域情報を発信する計画が進んでいる。

具体的にはまず情報誌を作成する為、企画や文章の作成を酪農家を中心に行う。

これらは、ワークショップやエコツアーを開催したことによって、今までになかった町内の繋がりがうまれる面白さを、仕組み化して継続していく工夫でもある。

浜中町の酪農地帯の話題が、色々詰まった

情報誌

みたいなのを一緒に作ろう！

3月28日
19時～21時

仲間募集

場所：**農協1F会議室**

何かやりたいなあと思っているあなたへ

地域に暮らす僕らが、広報誌を作ることを通じてお互いの事や地域の事を知り、それらを伝えて、さらに地域の繋がりが深まっていくような面白いことを始めたい。そのきっかけの一つがこの情報誌作りです。


地域や年代が違う人達が集まって話をすれば、色々な違いや気付きが出てきて面白そう。さらにそれを情報誌で伝えたら、きっと自分達の町や酪農地帯がもっと好きになったり、みんなが同じように悩んでいる課題を解決するアイデアや仲間も出てくるかもしれない。

大変な事が多い世の中だけど、それでも前向きに考えて、楽しめる人、集まろう！

興味を持った方はこちらへ

第一回目
「アイデアを考えて話す日」

最初の作戦会議を開催します。
日頃気になっている事、自分のアイデア、地域の課題などを書き出してみる作業からです。
途中参加ももちろんOK！
お菓子とお茶を用意して、お待ちしております。



緑の回廊の保全地へご登録ください（登録農家105戸、2164ha）
事務局：浜中町農業協同組合 三山まで(65-2141)

緑の回廊は、営農活動と自然の調和をめざして、植樹や保全地の登録などの自然保護活動や普及活動を行っています。

問い合わせ先：**霧多布湿原センター**
0153-65-2779 担当：阪野(ばんの)

霧多布湿原ナショナルトラストは、「緑の回廊」推進に協力しています。

プロジェクトの総括

平岡俊一（北海道教育大学教育学部釧路校）

筆者は、地域社会における市民参加・協働型の環境政策、環境まちづくりの推進について、ローカルガバナンス論の立場から、主にその担い手や推進体制に注目して研究を行っている。ここでは、そのような立場から本事業の成果や課題についてコメントしたい。

本事業の実施主体である NPO 法人「霧多布湿原ナショナルトラスト（以下、トラスト）」は、事業の前提としての浜中町が抱えている問題・課題として、地区や業種を跨いだ人材・組織間の交流・連携の欠如を指摘している。この点に関しては、筆者も浜中町において環境まちづくり活動について調査を行う過程で、多くの関係者から、同町の沿岸部と内陸部の地区がそれぞれ漁業と農業という性格の異なる産業を背景に成立していることから、その間における地区や住民の文化や考え方に少なからず違いがあり、個別に動くことが多かった、それによって、町全体として一体的なまちづくり活動が十分行われてこなかった、といった旨の指摘を耳にしている。よって、トラストが本事業において設定した問題意識は非常に的確なものであったと捉えられる。

そして、そうした問題意識を踏まえて、地域の多様な主体間の交流、ネットワーク形成を図ることを目的に、環境教育ならびに社会教育を軸としながら、環境 NPO が多様な地域の主体を巻き込んだ多数の実践事業を短期間のうちに実行したことには、以下に述べるような意義があったと考えられる。

ネットワーク形成の方法

第一は、環境教育ならびに社会教育活動が地域主体間のネットワーク形成を進める際の重要な取り組み手段になることを示した。主体間のネットワーク形成は、ガバナンス論の立場から見ると、まちづくりの基盤となる非常に重要な取り組みと位置付けられる。そういった意味で、環境保全に関する取り組みがまちづくり活動において重要な役割を果たし得ることを示唆するものであり、今後の日本における地域をあげた環境保全活動の活性化を考える上で、本事業は先行的な実証事例として他地域にとって参考になるものと捉えられる。

環境 NPO の地域社会での存在意義

第二は、環境 NPO が、多様な地域主体が連携して展開するまちづくり活動において、主体の間にたって調整等を図るコーディネーター役を果たし得ることを示した。これは、これまで、通常は行政セクターが担うものと考えられてきた役割を民間主体が担うことがで

きることを意味しており、今後のまちづくり活動推進のためのガバナンス構築を考える上で、地域におけるその担い手の多元化を示唆する事例として評価することができる。

そのような成果をあげた一方で、本事業は、単年度の短期間で完了しなければならない取り組みであったことが主な要因ではあるが、今後に残した課題もあると考えられる。

課題

第一は、トラストが中心となった事業であったので、ある意味では当然だが、実践活動の企画や運営などの事業の中核部分はトラストが主導する形で行われ、他の主体の積極的な参加は十分ではなかったように思われる。地域の各主体の交流、ネットワーク化を目的とするならば、その事業の中核的な部分自体についても、多様な主体が参加、連携して取り組むことも選択肢のひとつとしてあると思われる。

第二は、限られた期間と人員という制約下であったために致し方ないことであるが、事業の企画、実施に時間や労力をとられたため、本事業で計画された活動の企画次年度以降の継続のあり方については十分検討できなかったように思われる。本事業は、浜中町におけるまちづくり活動において重要な意味をもつものであり、今後も積極的に継続していることが望まれる。今回は外部資金を得て実施されたものだが、本事業の成果や課題について地域の関係主体間で十分に検討・共有した上で、今後の費用負担や役割分担などについて議論し、継続を担保できる仕組み・体制を構築していくことが重要になると考えられる。

本事業が残した成果ならびに課題は、いずれも地域レベルでの環境教育やまちづくり活動に取り組む関係者にとって非常に有益な知見であり、意義あるものと捉えられる。最後になるが、短期間のうちにこれだけ多数の事業を実施したトラストのみなさまならびに浜中町の関係各位に敬意を表すとともに、今後のさらなる取り組みの発展に期待したい。

文部科学省

平成 24 年度 「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究

ビジターセンターが核となったへき地活性化環境教育プロジェクト

平成 25 年 3 月

認定 NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラスト

〒088-1531 北海道厚岸郡浜中町仲の浜 122 番地

TEL0153-62-4600 FAX0153-62-4700

URL <http://www.kiritappu.or.jp/>